

日本中國學會報 第六十九集  
二〇一七年十月七日 發行 拔刷

遠山荷塘 『諺解校注古本西廂記』の成立経緯について

樊 可 人

# 遠山荷塘『諺解校注古本西廂記』の成立経緯について

二四二

樊 可 人

## はじめに

日本における『西廂記』の受容を考える際、遠山荷塘は無視することのできない人物である。遠山荷塘（一七九五～一八三二）、字は一圭、一溪、また荷塘道人とも稱した。大分で廣瀨淡窓の塾に入門し、長崎で唐話と清樂を學んだ。その後、龜井昭陽を訪れ、歡待された。のちに江戸に移ると、清樂を廣めつつ、『西廂記』、『琵琶記』などを講じた。僅か三十七歳で亡くなり、江戸の長命寺に葬られた。石崎又造氏に「一個の偉人」、山口剛氏に「奇士といつてもよいかも知れない」と評される荷塘の著作には、訓點や注が施された『諺解校注古本西廂記』（以下「諺解本」と呼ぶ）と『古本西廂記』（以下「古本」と呼ぶ）の二つがある。現在、兩本はいずれもその刊本や自筆稿本を見ることができないが、それぞれの傳鈔本が慶應義塾大學附屬研究所斯道文庫と國立國會圖書館に所藏されている。

兩本は、現在知られる中國以外で作られた唯一の『西廂記』テキストである。後ほど詳しく説明するが、龜井昭陽は遠山荷塘の『西廂記』が上梓されることを「盛舉」だと稱えた。そして、朝川善庵や大窪詩

佛といった名高い學者が参加した荷塘の『西廂記』講義には、彼の『西廂記』テキストが使用されたと思われる。そのため、諺解本と古本が『西廂記』受容史において極めて重要な意義を有することは明らかである。この二つの稿本の前後関係を説明することによって、遠山荷塘の編纂時の動機や目的だけではなく、江戸時代における『西廂記』の受容状況についても、新たな見解を提示できると考える。

しかしながら、従来の研究における兩本に關する論述は、ほとんどが簡単な紹介に留まっている。筆者の調べた限りでは、諺解本と古本の前後關係について論及しているのは、傳田章氏の「遠山荷塘の『諺解校注古本西廂記』」<sup>(3)</sup>だけである。傳田氏の研究により、兩本の内容や構成、さらには荷塘がこれらを編纂する際に参照した資料等が、かなり明らかとなった。ただし、筆者自身が二書に對して改めて校勘を行ったところ、いくつかの點で再検討する必要を感じた。そこで本稿では、遠山荷塘の事跡と結び付けつつ、これら兩本の成立過程について改めて考察を行い、筆者の考えを示したい。

なお、引用文の句讀點は筆者による。『西廂記』テキストの引用に關しては、筆者によっていくつか傍線を付した。また、原文の注は龜

甲括弧を付けて表した。

—

はじめに、二つの本の發見經緯及び基本書誌情報を見てみよう。まず諺解本について、長澤規矩也氏は次のように解説する。<sup>①</sup>

私も、學生時代から本書の傳本を搜してみたが、古城坦堂の生存中、その關口臺町の邸を訪れて、坦堂が得意顔に本書を示されたことがあつた。今、坦堂の藏書が細川家に入り、斯道文庫に永青文庫本として寄託されてゐるので、之を底本にして影印した。

ちなみに、長澤氏に諺解本を示した古城貞吉は、「書『諺解校注古本西廂記』後」で、諺解本について次のように述べる。<sup>②</sup>

『諺解校注古本西廂記』五卷、題曰、「雲遊道人荷塘凡夫譯。」無序、跋、凡例。大要以王伯良『新校注古本西廂記』爲藍本。兼採凌初成即空觀本。編摩詮釋、多易置原第。

『諺解校注古本西廂記』五卷、題に曰く、「雲遊道人荷塘凡夫譯す」と。序、跋、凡例無し。大要王伯良の『新校注古本西廂記』を以て藍本と爲す。兼ねて凌初成即空觀本を採る。編摩詮釋し、原第を易置すること多し。

右の文章に言及される王伯良は、明の王驥徳のことで、彼は『新校注古本西廂記』(以下「王本」と呼ぶ)を編纂した。王本は全體が五つの「折」に分けられ、それぞれの折は四つの套からなる。また、楔子は見られない。「曲律」の作者でもある王驥徳は、自身の編纂した『西廂記』に曲文の發音や押韻、出典の考證等の詳細な注を付けた。一方凌初成は、同じく明の凌濛初のことである。彼が校注した『西廂記』(以下「凌本」と呼ぶ)は中が五本に分かれ、各本は四つの「折」と一楔子からなる。

遠山荷塘『諺解校注古本西廂記』の成立經緯について

また、注の中でしばしば王伯良の説を引用してそれを批判している。<sup>③</sup>荷塘は主にこの二人が校注した『西廂記』に基づいて、自身の『西廂記』を編纂した。<sup>④</sup>

右の説明を補足すると、まず諺解本は五卷に分かれている。内題は、卷二は「讀西廂記卷之二」となっているが、卷一及び卷三、卷五は「諺解校注古本西廂記卷一(三、五)」となっている。そして、卷一の内題次行に「雲遊道人荷塘凡夫譯」、卷三と卷四に「雲遊(遊)道人荷塘凡夫校注」、卷五に「元大都關漢卿續 雲遊道人荷塘譯」と書かれている。曲白には句讀點、返り點、送り假名が付されており、欄内には斷句された雙行細字の注が見られる(時折斷句されていない注も見られる)。また注の中に、さらに小さい雙行注が挟まる場合もある。欄外には、欄内注よりも小さい注が見られるが、どの冊にもそれが書かれた年次などの記述は見当たらない。

次に國立國會圖書館所藏の古本を見てみよう。これは大正八年十一月に加藤義三と嗣子茅氏が寄贈したものである。卷一、卷二を乾冊、卷三、卷五を坤冊と分けており、諺解本と同じく成書の時期に關する記述は見当たらない。

傳田章氏の「遠山荷塘の『諺解校注古本西廂記』」によると、古本の乾冊(卷一、卷二)は「もっぱら凌本の本文をうつして」おり、坤冊は「a本(筆者注…諺解本を指す)と同じく王伯良本の形式を採っている」。實際、古本乾冊の内題は諺解本とは違い、卷一に「校注西廂記卷之一」、卷二に「校注西廂記卷之二」と書かれており、また卷一の内題次行には「元王實甫填詞 雲遊道人荷塘注釋」、卷二の内題次行には「元大都王實甫填詞」と書かれているが、坤冊(卷三、卷五)になると、その體裁は諺解本とほぼ同じで、内題は「諺解校注古本西

廂記卷三(五)と書かれている。また、卷三、卷四の内題次行は「雲遊(遊)道人荷塘凡夫校注」、卷五は「元大都關漢卿續 雲遊道人荷塘譯」となっており、諺解本と同じである。

古本の曲白には、諺解本と同様に句讀點、返り點、送り假名が付けられており、欄内には斷句された雙行細字の注が見られ(時折斷句されていない注も見られる)、注の中にさらに小さい注が入れ込まれる場合もある。また、欄外には欄内注よりも小さく書かれた注が見られる。ただし、古本には時に諺解本の注の付け方とは少し異なり、曲文を切つて、その間に注を入れ込む形式も見られる。

兩本いずれにも、成書の時期や「初稿」か「改稿」かといった問題に關わる記述は見られない。傳田章氏は「遠山荷塘の『諺解校注古本西廂記』において、注の複雑化を根據にこれら二つの本の成立關係について次のように述べる。

また、原注の行文の前後をいれかえたり、一部を書きかえたりする例はa本では數えるほどしか例がないが、b本では比較的多くみられる。(逆にa本で變化のあるものをb本で原注の順になおした例もないではないがその數は少い。)

a、b兩本いずれにも、それが書かれた年次や「初稿」か「改稿」かというようにことに直接言及することばはみつからない。したがつて先後の判斷は本文や付注の比較から考えるほかはないのだが、いまb本がa本より後の稿であると推定する最大の理由は以上述べたような注の文の複雑化である。ともに王、凌注の行文の抄寫という大枠では變りはないのだが、b本の注の方が、比較的に手がこんでいるのである。(筆者注…a本は諺解本を、b本は古本を指す)

さらに、諺解本の第四折と第五折には併せて三十五の欄外注が存在するが、古本ではそれらが全て欄内に取り込まれている。また、前述のように古本では本文を切つて注を挿し込む例が見られ、注の付け方がより複雑であることから、傳田氏は古本が諺解本より後の稿であると推定した。ただし氏は、「遠山荷塘の『諺解校注古本西廂記』」を發表してから一年後に出版された『増訂明刊元雜劇西廂記目錄』で古本を新たな資料として加え、次のように説明した。<sup>8)</sup>

卷一、卷二の底本は凌初成本、卷三(五)は「諺解校注古本西廂記卷三(五)」と題してより多く王伯良本によつてゐる。斯堂文庫藏本の草稿か。國會圖書館藏、大正8年11月、加藤義三、嗣子同茅氏寄贈。

ここでは、古本は諺解本の草稿ではないかという、前説と逆の可能性を提示している。但し、その理由については全く言及がされていない。

だが確かに、諺解本の卷一、卷二には古本の欄外注を欄内に取り込んだ例が見られるし、古本の乾坤二冊はそれぞれ凌本、王本という異なる體裁の本に従つていて、一冊の本の中で前後の體裁が不統一であるため、古本が諺解本の改稿であるという見解にはどうしても疑念が残る。そこで、筆者はこれら二つの本について、改めて校勘を行つてみた。その結果、まず古本の乾冊(卷一、卷二)は凌本に基づくのに対し、諺解本はおおよそ王本に基づくという右の傳田氏の指摘が正しいことが確かめられた。

まず、古本と諺解本それぞれの卷一を見てみよう。<sup>9)</sup>

#### \* 古本乾冊・卷一

張君瑞鬧道場雜劇 第一折

末云 琴童料持①下响午飯。那裏走一遭②便回來也。童 安排下飯、撒和了馬、等哥哥回家。③下

凌本第一本

張君瑞鬧道場雜劇 第一折

末云 琴童料持①下响午飯。那裏走一遭②便回來也。童云 安排下飯、撒和了馬、等哥哥回家。③下

\* 諺解本卷一

第一折 一套 遇艷

末云 琴童辨①下响午飯。俺到那里走一遭②便回來也。③下

王本卷一

第一折 一套 遇艷

生云 琴童辨①下响午飯。俺到那里走一遭②便回來也。③下

①では、古本と凌本は「料持」となっているのに對し、諺解本と王本は「辨(辨)」となつてゐる。②では、古本と凌本は「那裏走一遭」となつてゐるのに對し、諺解本と王本は「俺到那里走一遭」となつてゐる。さらに、③では、古本と凌本に見られる下僕の臺詞が、諺解本と王本には見られない。

類似する例は卷二にも見られる。

\* 古本乾册・卷二

崔鶯鶯夜聽琴雜劇 第四折

末云 窓外是有人①、已②定是小姐、我將絃改過、彈一曲、就歌一篇、名曰「鳳求風」。(中略)願小姐如有③文君之意。歌曰 有美人兮、見之不忘。一日不見兮、思之如狂。鳳飛翩翩④兮、四海求風。無奈佳人兮、不在東牆。張弦⑤代語兮、欲訴衷腸⑥。

凌本第二本

崔鶯鶯夜聽琴雜劇 第四折

末云 窓外是有人①、已②定是小姐、我將絃改過、彈一曲、就歌一篇、名曰「鳳求風」。(中略)願小姐如有③文君之意。歌曰 有美人兮、見之不忘。一日不見兮、思之如狂。鳳飛翩翩④兮、四海求風。無奈佳人兮、不在東牆。張絃⑤代語兮、欲訴衷腸⑥。

\* 諺解本卷二

第二折 四套 寫怨

末云 窓外有人①、擬②定是小姐、我將絃改過、彈一曲、就歌一篇、名曰「鳳求風」。(中略)願小姐有③文君之意。歌曰 有美人兮、見之不忘。一日不見兮、思之如狂。鳳飛翩翩④兮、四海求風。無奈佳人兮、不在東牆。張琴⑤代語兮、聊寫微腸⑥。

王本卷二

第二折 四套 寫怨

生云 窓外有人①、擬②定是小姐、我將絃改過、彈一曲、就歌一篇、名曰「鳳求風」。(中略)願小姐有③文君之意。歌曰 有美人兮、見之不忘。一日不見兮、思之如狂。鳳飛翩翩④兮、四海求風。無奈佳人兮、不在東牆。張琴⑤代語兮、聊寫微腸⑥。

①では、古本と凌本は「窓外是有人」となつてゐるのに對し、諺解本と王本は「窓外有人」となつてゐる。②では、古本と凌本は「已」となつてゐるのに對し、諺解本と王本は「擬」となつてゐる。③では、古本と凌本は「如有」となつてゐるのに對し、諺解本と王本は「有」となつてゐる。④では、古本と凌本は「翩翩」となつてゐるのに對し、諺解本と王本は「翩翩」となつてゐる。⑤では、古本と凌本は「張弦(絃)」となつてゐるのに對し、諺解本と王本は「張琴」となつてゐる。さらに、⑥では、古本、凌本は「欲訴衷腸」となつてゐるのに對し、

諺解本、王本は「聊寫微腸」となっている。

こうした例から、古本の乾冊(卷一、卷二)は凌本に基づいていることが分かる。また、諺解本の卷一、卷二は細部で凌本を参考にしたと思われる箇所がある(襯字の取捨選擇や、王本の「生」を凌本の「末」に變える等)が、基本的には王本に基づいていると言える。また、折の分け方や標目の付け方からも、諺解本の卷一、卷二は王本に、古本の乾冊は凌本に基づいていることが分かる。

しかし坤冊になると、古本の體裁は一變し、諺解本と同じく、王本に基づくようになる。ここでは、それぞれの卷三から例を挙げる。

\* 古本坤冊・卷三

第三折 一套 傳書

油葫蘆 憔悴潘郎鬢有絲、杜韋娘不似舊時、帶圍寬減①了瘦腰肢。一箇昏昏無意看②經史、一箇意懸懸不待③拈針黠④。(中略) 兩下里一樣⑤害相思。

\* 諺解本卷三

第三折 一套 傳書

油葫蘆 憔悴潘郎鬢有絲、杜韋娘不似舊時、帶圍寬減①了瘦腰肢。一箇昏昏無意看②經史、一箇意懸懸不待③拈針黠④。(中略) 兩下里一樣⑤害相思。

王本卷三

第三折 一套 傳書

油葫蘆 憔悴潘郎鬢有絲、杜韋娘不似舊時、帶圍寬減①了瘦腰肢。一箇昏昏無意看②經史、一箇意懸懸不待③拈針黠④。(中略) 兩下里一樣⑤害相思。

凌本第三本

張君瑞害相思雜劇 第一折

油葫蘆 憔悴潘郎鬢有絲、杜韋娘不似舊時、帶圍寬清減①了瘦腰肢。一箇昏昏不待觀②經史、一箇意懸懸嬾去③拈鍼指④。(中略) 兩下裏都一樣⑤害相思。

①では、古本、諺解本、王本は「帶圍寬減」となっているのに對し、凌本は「帶圍寬清減」となっている。②では、古本、諺解本、王本は「無意看」となっているのに對し、凌本は「不待觀」となっている。③では、古本、諺解本、王本は「不待」となっているのに對し、凌本は「嬾去」となっている。④では、古本、諺解本、王本は「針黠」となっているのに對し、凌本は「鍼指」となっている。さらに⑤では、古本、諺解本、王本は「一樣」となっているが、凌本は「都一樣」となっている。こうした例が卷五まで見られるため、古本の坤冊(卷三、卷五)は王本に基づいていることが分かる。また諺解本は、卷一、卷二同様、卷三、卷五においても細部で凌本を参考にしたと思われる箇所があるが、全體的に見れば王本に基づいていると言える。

二

さて、前述したように、傳田氏は諺解本より古本の注のほうが複雑であることから、古本のほうが後に書かれた本だと推測している。しかし、遠山荷塘が亡くなった八日後、朝川善庵が龜井昭陽に出した書簡に次のような一文が見られる。<sup>10)</sup>

著述脱稿者、有『月琴考』、『西廂記注釋』、『胡言漢語』三部、諸友相謀、行將上梓。

著述の脱稿する者、『月琴考』、『西廂記注釋』、『胡言漢語』三部有り、諸友相ひ謀り、行將に上梓せんとす。



また、遠山荷塘が亡くなった一年後の天保三年（二八三二）に朝川善庵が書いた「荷塘道人圭公傳碑」（以下「傳碑」と呼ぶ）に次のようにある。<sup>(1)</sup>

著書滿家、率未卒業。其僅脱稿者、『北西廂記注釋』、『月琴考』、『胡言漢語考』數部耳。

著書家に滿つるも、<sup>おほむ</sup>率未だ業を卒へず。其の僅かに脱稿するは、『北西廂記注釋』、『月琴考』、『胡言漢語考』數部のみ。

これらの資料から、『北西廂記注釋』は間違いなく脱稿したものと分かる。だとすれば、乾冊では凌本の體裁を、坤冊では王本の體裁を採る古本は、脱稿した本とは考えにくいだろう。

そこで、筆者はさらに兩書の注文についても校勘を行った。その結果、諺解本は古本よりも前後の食い違いが少なく、完成度が高いことが分かった。これによつても、諺解本は古本より後に書かれた本ではないかと考える。以下、このことについていくつかの例を擧げて説明する。

まず、兩書の卷一に次のような例が見られる。

#### \* 古本乾冊・卷一

張君瑞鬧道場雜劇 第二折

〔五煞〕小姐年紀小、性氣剛。張郎倘得相親傍、乍相逢厭見何郎粉、看邂逅偷將韓壽香。纔到是未得風流況、成就了會溫存的嬌婿、怕甚麼能拘束的親娘。〔王云〕①「乍相逢」句、應「年紀小」句。『看邂逅』句、應「張郎」句。大約言鶯年小氣剛、未得風流之情況、故尙厭畏於我、看我得親傍而一竊其香之後、彼自然愛我溫存不暇、而尙肯懼夫人之拘束耶。』

#### \* 諺解本卷一

遠山荷塘『諺解校注古本西廂記』の成立経緯について

#### 第一折 二套 投禪

〔五煞〕小姐年紀小、性氣剛。張郎儻得相親傍、乍相逢厭見何郎粉、看邂逅偷將韓壽香。纔到是未得風流況、成就了會溫存的嬌婿、怕甚麼能拘束的親娘。〔①〕「乍相逢厭見何郎粉」、應「年紀小性氣剛」句。「看邂逅偷將韓壽香」、應「張郎倘得相親傍」句。大約言鶯年小性剛、未得風流之情況、故尙厭畏於我、看我得親傍而一竊其香之後、彼自然愛我溫存不暇、而尙肯懼夫人之拘束耶。』

この「五煞」という曲に對する注はすべて王注からの引用であるが、兩書を見比べると、明らかに違ふところがある。それは①の箇所、古本では記述が簡略であり（諺解本で「乍相逢厭見何郎粉」となっている）、古本では「乍相逢」となっているなど、「王云」の二文字も見られるのに對し、諺解本では記述はそのまま王注が寫されているもの、「王云」が消されていることである。

また、卷二には次のような例が見られる。

#### \* 古本乾冊・卷二

崔鶯鶯夜聽琴雜劇 第三折

〔雙調〕五供養 若不是張解元識人多、別一箇怎退干戈。排着酒果、列着笙歌。篆煙微、花香細、散滿東風簾幕。救了爹全家禍、殷勤呵正禮、欽敬呵當合。〔幕〕叶「磨」、「合」叶「何」。卽云①、「篆煙」、香煙也、前一折中已有辨正。徐本妄改「串煙」、而王前亦作「篆煙」、而此忽從「串煙」、且引「梧桐雨」、「漢宮秋」諸劇及散套爲證。及查彼本、仍是「篆」字、不知何僻而必欲強更之、以申徐說。』王云②、「末二句言殷勤欽敬、於禮當合也。董詞、『落落薰砌、香滿東風簾幕。』」

#### \* 諺解本卷二

第二折 三套（今本第七折）負盟

【雙調】五供養、若不是張解元識人多、別一箇怎退干戈。排着酒果、列着笙歌。篆煙微、花香細、散滿東風簾幕。救了咎全家禍、殷勤呵正禮、欽敬呵當合。「幕」叶「磨」、「合」叶「何」。○①「篆煙」、徐本妄改「串煙」、前一折已有辨。王前亦作「篆煙」、而此忽從「串煙」、且引「梧桐雨」、「漢宮秋」諸劇爲證。及查彼本、仍是「篆」字、不知何解而必欲強更之、以申徐說。②末二句言殷勤欽敬、於禮當合也。董詞、「落花薰砌、香滿東風簾幕。」

この「五供養」という曲に對する注には王注と凌注の兩方が見られる。①では、古本には「即云」と書かれているのに對し、諺解本にはそれが見られず、②では、古本には「王云」の二字が見られるのに對し、諺解本にはそれが見られない。遠山荷塘は、古本の後改めて諺解本を作る際に、「王云」、「即云」を削つて自ら校注を施したかのような書き方をするので、全體の統一を圖ろうとしたのではないだろうか。なお、このことについては後で改めて述べる。

古本の第三折と第四折では、本文を區切つてその間に注を入れる例が何箇所もあり、注の付け方が諺解本より複雑となつてゐることから、古本は諺解本より後に書かれた本だと傳田氏は考へる。だがむしろ、諺解本はこうした古本の注を削つたり、欄外に移したりすることによつて、もとの食い違いや誤りを修正したと考へる方が自然ではないだろうか。例えば、兩書の第三折の一套に、次のような例が見られる。

\*古本坤冊・卷三

第三折 一套 傳書

【仙呂】賞花時 俺姐姐鍼線無心不待拈、脂粉香消懶去添。「王云、

「古本『胭粉』、較今作『脂粉』似俊、今本作『香消』、與上『無心』

不對。」①春恨壓眉尖、若得靈犀一點、敢醫可了病懨懨。②（中略）旦云紅娘去了、看他回來說甚麼話、我有主意。下末上云害殺小生也。自那夜聽琴之後、再不能勾見俺那小姐。（中略）紅上云奉小姐言語、着我去看張生、須索走一遭。

\*諺解本卷三

第三折 一套 傳書

【仙呂】賞花時 俺姐姐鍼線無心不待拈、脂粉香消懶去添。①春恨壓眉尖、若得靈犀一點、敢醫可了病懨懨。②（中略）旦云紅娘去了、看他回來說甚麼話、我有主意。下末上云害殺小生也。自那夜聽琴之後、再不能勾見俺那小姐。（中略）紅上云奉小姐言語、着我去看張生、須索走一遭。

曲文の「脂粉香消」は凌本に從つたものであるが、①のところで、古本は「添」字の後ろで一旦文を切り、王注を入れてゐる（傍線を付した箇所）。その注によると、「脂粉香消」は古本ではなく、今の版本に見られる表現だということである。遠山荷塘は自らが校注した『西廂記』を古本と名付けたにも関わらず、自身が從つた曲文が古本のものではないと指摘する王伯良の注をそのまま引用するという矛盾を犯している。そのため、諺解本を作る時にはこの注を削つたのではないだろうか。また②のところで、古本には「下」という退場を指示するところばは見られないが、諺解本にはそれが見られる。前後の流れを考えれば、紅娘はこの一曲を歌つた後に退場しなければならぬので、「下」と書くのが妥當である。そこで、遠山荷塘は諺解本を作る時にそれを補つたのだと考へられる。王注にせよ、「下」という指示にせよ、辻褁を合わせるための修正だと言へるのではないだろうか。

さらに、第四折的一套に、諺解本が古本の誤字を修正する次のよう



な例が見られる。

\* 古本坤冊・卷四

第四折 一套 就歡

〔天下樂〕我則索倚定門兒手托腮、好着我難猜、來也那不來。夫人行料應難離側。望得人眼欲穿、想得人心越窄、多管是冤家不自在。〔穿〕與「側」同叶。(後略)

\* 諺解本卷四

第四折 一套 就歡

〔天下樂〕我則索倚定門兒手托腮、好着我難猜、來也那不來。夫人行料應難離側。望得人眼欲穿、想得人心越窄、多管是冤家不自在。〔穿〕與「側」同叶。(後略)

右に見られる音注は、王本では「窄與側同叶」となっており、曲文の六句目「想得人心越窄」の「窄」字に對する説明だと考えられる。古本では、誤つて一つ前の句に見える「穿」の字を書いてしまったため、諺解本ではそれを修正したと考えられる。

また、諺解本の第四折には、古本の注を欄外に移すことによつて、古本の誤りを修正した箇所が見られる。

\* 古本坤冊・卷四

第四折 一套 就歡

〔鵲踏枝〕恁的般惡搶白、〔恁〕音「飀」、受也。「握」、延握也。〕並不曾記心懷。怎得箇意轉心回、夜去明來。空調眼色經今半載、這其間委實難捱。

\* 諺解本卷四

第四折 一套 就歡

〔鵲踏枝〕恁的般惡搶白、並不曾記心懷。怎得箇意轉心回、夜去

遠山荷塘『諺解校注古本西廂記』の成立経緯について

明來。空調眼色經今半載、這其間委實難捱。

〔欄外〕〔恁〕音「飀」、受也。「握」、延握也。〕

古本では、曲文の一句目「恁的般惡搶白」の後ろに、王本に見られる「恁」音「飀」、受くるなり。『捱』、延捱なり。』という注釋を入れるが、その「捱、延捱なり」は、明らかに曲文の最後に見える「捱」字に對する注であるため、古本の注の付け方には問題がある。さらに、「捱」字は古本では誤つて「握」字に作つてゐる。そこで、遠山荷塘は諺解本を作る時に「握」を「捱」に修正し、また、その注を欄外に移したと考えられる。

同じく第四折の一套に次のような例が見られる。

\* 古本坤冊・卷四

第四折 一套 就歡

〔柳葉兒〕我將備做心肝兒般看待、點汚了姐姐清白。小生忘殞廢寢舒心害、若不是真心耐、志誠捱、怎能勾這相思若盡甘來。〔連上曲看、首三語亦墮惡境。「舒心害」、放心受害也。聖歎云、「點汚了小姐清白、此其語可知也。聖歎更不說也。」余亦不說也。徐云、「此處語意少露、殊無蘊藉。昔人有濃鹽赤醬之謂、信夫。」〕

\* 諺解本卷四

第四折 一套 就歡

〔柳葉兒〕我將備做心肝兒般看待、點汚了姐姐清白。小生忘殞廢寢舒心害、若不是真心耐、志誠捱、怎能勾這相思若盡甘來。〔連上曲看、首三語亦墮惡境。「舒心害」、放心受害也。聖歎云、「點汚了小姐清白、此其語可知也。聖歎更不說也。」余亦不說也。〕〔欄外〕〔徐云、「此處語意少露、殊無蘊藉。昔人有濃鹽赤醬之謂、信夫。」〕

古本の注の最後に見られる徐注（傍線を付した箇所）は凌本からの引用であるが、實はその注は、前の段落に見られる「後庭花」という曲についての注であるため、諺解本ではこの一文を欄外に移したと考えられる。

また卷五にも、辻褄を合わせるために行った修正が見られる。

\* 古本坤冊・卷五

第五折 一套 報第

醋葫蘆 爾逐宵野店上宿、休教包袱做枕頭、怕油脂膩展汚了恐難酬。儻或水侵雨濕休便扭、我則怕乾時節熨不開褶皺。一椿椿一件件細收留。（王云、『油脂』上元有『怕』字、與下『恐』字礙、今去之。『油脂展汚恐難酬』、言展汚則難以酬贈人也。（後略））

\* 諺解本卷五

第五折 一套 報第

醋葫蘆 爾逐宵野店上宿、休教包袱做枕頭、怕油脂膩展汚了恐難酬。儻或水侵雨濕休便扭、我則怕乾時節熨不開褶皺。一椿椿一件件細收留。（『油脂展汚恐難酬』、言展汚則難以酬贈人也。（後略））  
曲文の三句目に見られる「怕」の字は凌本に従ったものであるが、凌本はこの曲に注を付していないため、荷塘は王本の注を引用した。古本の王注には、「怕」字が同じ句の中の「恐」字と重複するため、これを消したという一文（傍線を付した箇所）が見られる。それを、諺解本を作る際には紛らわしくないように消したのだと思われる。

傳田氏は古本卷三〇五は諺解本卷三〇五の「清書」だと言う。だが、右に挙げた例のように、曲文に挟まれた注を欄外に移すことによつて元の誤りを修正したと思われる箇所が存在することから、諺解本の後に古本が作られたとは考えにくい。逆に、もともと乾冊では凌本に基

づき作られていた古本は、坤冊からは王本に基づいて作られるようになり、その完成後、さらに改稿として諺解本が編み直されたと考えべきであろう。古本の内題が乾冊（卷一、卷二）の「校注西廂記」から坤冊（卷三〇五）の「諺解校注古本西廂記」の「諺解校注」へと変わったのは、こうした底本の變更が関係していると思われる。また、「諺解（＝口語的な解釋）」という書名が表すように、荷塘は王本に基づいて、『西廂記』に分かりやすい校注を施そうとしたと考えられる。さらに、諺解本を作る時に、古本にもともと見られた曲文と注の食い違いを修正しただけでなく、古本乾冊の注に見られた「王云」、「即云」といったことばを削り、いくつかの注を織り交ぜて付けるなどして、自らが注を施したかのような書き方に變えたのだと考えられる。

三

筆者は、遠山荷塘が古本の底本を坤冊から王本に變えた理由は、江戸で行った會讀や講義において、原文を唐音で發音するためだと考えている。

遠山荷塘は江戸に移った後、『西廂記』、『琵琶記』のほかに、『水滸傳』、『金瓶梅』の講義や會讀も行っていた。川島優子氏は、「江戸時代における白話小説の讀まれ方―鹿兒島大學付属圖書館玉里文庫藏『金瓶梅』を中心として―」において、『金瓶梅』の讀書會でも、長崎留學で中國語をマスターした遠山荷塘先生によつて唐音の音讀、或いは發音の指導が行われていたようだ。」と指摘している。

また、廣瀬旭莊の『日閒鎖事備忘』弘化二年七月六日の條には次のように書かれている。

松岡古春嘗謂余曰、「圭師之東、龜先生屬諸某。某周旋善菴諸老

之間爲之先容。聲名稍噪、遂以華音寵於薩老侯榮翁公。」

松岡古春嘗て余に謂ひて曰く、「圭師 東に之きしとき、龜先生諸を某に屬す。某 善菴諸老の間を周旋して之が爲に先容す。聲名稍く噪ぎ、遂に華音を以て薩老侯榮翁公に寵せらる」と。

唐音ができたことは、當時の荷塘に有利に働いた。そのため、彼は『西廂記』の講義や會讀でも、長崎で學んだ唐話を使つたと思われる。

『西廂記』は元雜劇の本であるから、その中の歌は普段の發音ではなく、他の聲調や發音で讀む場合がしばしばある。古本を標榜する王本では、殆どの曲文の後ろに發音する際に注意が必要な字についてそれぞれ音注が付けられており、また各套の後にその中の曲に關する出典の考證や押韻の法則等の詳細な注が施されている。それは荷塘にとつて、大變役に立つたはずである。そのため、王本を入手してからはこれに基づき、その注を自身の『西廂記』に取り込んだと考えられる。例えば、諺解本第二折(卷二)の一套「解圍」には次のような例が見られる。

〔天下樂〕我則索鬪伏定鮫綯枕頭兒上盹。但出閨門、影兒也似不離身。這些時恁般隄備人。小梅香伏侍的勒、老夫人拘繫的緊、則怕女孩兒家折了氣分。〔「蹋」音「塔」。〕「盹」音「敦」、上聲。「分」、去聲。(後略)

「蹋」、「盹」、「分」に對する音注はすべて王本からの引用である。また、第三折(卷三)の四套「訂約」には、次のような王本からの引用が見られる。

〔鬼三臺〕足下其實擘、伴粧晤。箇箇風魔翰林、無處問佳音、向簡帖兒行計稟。得箇紙條兒恁般綿裏針、見那玉天仙怎生軟廝禁。俺小姐正合忘恩、赤緊的儂人負心。〔「擘」音「林」、去聲、古注

遠山荷塘『諺解校注古本西廂記』の成立経緯について

音「吝」、非。「晤」音見前、古注音「吞」、去聲、非。「稟」、筆錦反、俗音「丙」、非。「禁」、平聲。(中略)「稟」字亦屬閉口、在庚清韻、下「忘恩」、元不用韻。」

發音だけでなく、押韻についても丁寧に説明する王注は、講義や會讀を行う者にとつて大變貴重な資料だつただろう。遠山荷塘は王本を入手した後、主に王、凌兩本に基づいて古本の乾冊に注を付したが、王本で音注が付けられている文字が、時々凌本の曲文には見えないため(例えば右の「天下樂」に見える「蹋」字等)、坤冊からは王本に基づく方針に轉換した。そして、古本の乾冊(卷一、卷二)を改めて王本に基づいて作り直し、さらに王本に基づき書いた古本の坤冊(卷三、卷五)にも修正を加えて諺解本を編んだと考えられる。

先に述べたように、遠山荷塘は江戸で『金瓶梅』の讀書會に参加していた。この時の彼の發言が、鹿兒島大學附屬圖書館玉里文庫所藏の『金瓶梅』(以下「玉里本」と呼ぶ)から確認できる。

玉里本には『西廂記』に關する注がしばしば引かれているが、これらの注が諺解本や古本と關係があるのかどうかについては、從來の研究では指摘がされていない。そこで、筆者はこれに關して調査を行った。まず、第一回の三四丁の欄外に、「金蓮」という言葉に對して付された次のような注が見られる。

三寸ノ金蓮トハ三寸ノアシト云「也。

『南史』齊東昏侯、「鑿金爲蓮花貼地、令潘妃行其上、曰、『此步歩生金蓮也。』」故今稱婦人行曰「金蓮歩」云云。『西廂記』ノ典釋ニミユ。

そして、古本乾冊・卷一の第二折の「三煞」には、「翠裙鴛繡金蓮小」という曲文に對する次のような注が見られる。

金蓮、齊東昏侯、鑿金爲蓮花貼地、令潘妃行其上、曰、「此步步生蓮花也。」故今稱婦人行曰「金蓮步」或直稱「脚」。(後略)ここから、玉里本に見られる『西廂記』ノ典釋」は古本の注釋を指していると思われる。だが一方で、同回の第一四丁に見られる「咱到日後」と「俺爹」に對する欄外注は、

『西廂記』典釋、

〔咱〕音查、「咱每」猶言「我們」也。北人呼「我」曰「咱」、義與「俺」同。

〔俺〕北人自稱曰「俺」、猶「我們」也。

と、諺解本と古本に似た注はあるものの、完全に一致するものが見られないため、必ずしも古本を參考にしたとは言えない。

古本だけでなく、諺解本にも、玉里本と一致する注が見られる。玉里本第六回の第五丁に見える「葫蘆提」について、欄外に「葫蘆提、方言糊塗之意、又猶云不明白。」とあり、諺解本の第一折(卷一)第四套の「鴛鴦煞」にこれと一致する注が見られる。

これらのほか、第五七回の一丁に見える「伽藍」について、欄外注に「『西廂記』注、佛家稱護法者曰「伽藍」。』とあり、諺解本や古本以外の『西廂記』テキストを引用する例が見られる。

徳田武氏は、玉里本に引かれる語釋と『胡言漢語』(『唐話辭書類集』第一卷)を比較し、「荷塘が平生に漢籍や通俗文學を閱讀する際に語釋ノートを作っていて、それに基づいて中國俗文學を解釋するという方法を持っていたことは確かなことである」と指摘する。これらのことを踏まえれば、玉里本に引かれる『西廂記』の注は直接古本や諺解本を參考にしたというよりも、荷塘が『西廂記』を作るために集めた語釋ノートから出たと考えたほうがよいであろう。

ところで、「金蓮」ということばを解釋する注が諺解本に取り入れられていないことは、まさしく『西廂記』の講義が學問的水準の高いものであったことを物語る。「傳碑」によると、遠山荷塘の講義に參加した者の中には朝川善庵や大窪詩佛といった、當時の名高い漢學者が名を連ねていた。そのため、荷塘は一一の言葉の意味を解釋する必要はないと考えたと思われる。諺解本卷二の内題には「讀西廂記卷之二」と書かれていることから、實際に講義に使われた本は古本ではなく、發音や韻律、方言などの難解な部分だけを説明する諺解本であったと考えられる。

#### 四

諺解本の完成した時期について詳しいことは分からない。ただし、文政九年(一八二六)に龜井昭陽が遠山荷塘の二通の書簡に對して書いた返書(「與圭上人」)に「『西廂記』上梓。何等盛舉。」(『西廂記』上梓せらる。何等盛舉なる。)とあることから、文政九年一月頃には既に完成していたか、或いは完成に近かったと思われる。少なくとも、文政十二年(一八二九)に刊行された『譯解笑林廣記』の奥付に「諺解校注古本北西廂記 元王實甫填詞、荷塘先生注釋 近刻」と書いてあることから、文政十二年までにはそうした状態にあったと言えるだろう。

諺解本の編纂には、日本に唐話學習及び中國俗文學を廣め、それによつて自身の功績を残したいという遠山荷塘の思いがあったのではないかと思われる。彼と親交のあつた龜井昭陽や廣瀬淡窓一門は唐音や中國の俗文學に大變興味を持つており、それらの學習に意欲を示していた。また、「傳碑」には次のように書かれている。



先是江戸文人無精於傳奇者。何況詞曲乎。若摘月琴者、絶不見其人。而師兼能之、竟以是名家。人亦以是稱之。

是れに先んじ江戸の文人に傳奇に精しき者無し。何ぞ況んや詞曲をや。月琴を摘するが若きは、絶えて其の人を見ず。而るに師兼能て之を能くし、竟に是れを以て名家たり。人も亦た是れを以て之を稱ふ。

このことから、當時は江戸の文人たちも、中國の俗文學についてはそれほど詳しくなかつたことが分かる。そこで荷塘は人々の俗文學に對する理解を深めるため、作品を作ることにした。文政九年二月、昭陽が書いた「又（復圭上人）」に次のようにある。

然留錫不日、使天下大都會書價俄騰者、井蛙如僕、未嘗聞有其人也。盛哉。上人且賢勞矣。當此忙忙、猶欲有所論著、以破世癡闇。然れども錫を留むること日ならずして、天下の大都會の書價をして俄かに騰がらしむる者、井蛙の僕の如きは、未だ嘗て其の人有るを聞かざるなり。盛んなるかな。上人且つ賢勞す。此の忙忙たるに當たるも、猶ほ論著する所有りて、以て世の癡闇を破らんと欲す。

さらに、文政七年、遠山荷塘が廣瀨淡窓に別れを告げ、江戸に向かつた時に淡窓が送った「送圭師序」の中に荷塘の次のような發言が見られる。

余異日成名於叢林乎。子玉則文辭、子究則方技、三人鼎足而立、庶幾不負夫子與龜子哉。

余異日に名を叢林に成さんかな。子玉は則ち文辭、子究は則ち方技、三人鼎足して立ち、庶幾はくは夫子と龜子とに負かざらんことを。

彼が龜井昭陽や廣瀨淡窓の期待に應えて中島子玉や岡研介と並ぶほどの人物になろうという志を抱いていたことが分かる。

諺解本は現在分かっている中で日本人が訓譯した最古の『西廂記』であり、作者の遠山荷塘は唐話と俗文學に通じるといふ自身の強みを活かしてこれを編纂した。そうすることによつて、日本に唐話や俗文學の知識を普及させることができたばかりでなく、そうした學問の領域における先驅者ともなることができたのである。

しかし、『西廂記』のような元雜劇には方言や俗語などの難解な表現が多く含まれており、また雜劇で使われる曲韻は詩韻とは異なるため、遠山荷塘にとつてこれを校注することは非常に難しかったと思われる。そのため、本文と注釋の大部分は現存するテキストを組み合わせることで作られている。例えば、諺解本の第一折（卷一）の三套「廣句」には次のような例が見られる。

紅云 姐姐、咱家去來、怕夫人嗔責。鶯鶯紅娘關角門下

「鶯鶯紅娘關角門下」という指示は、金聖嘆の『第六才子書西廂記』からの引用である。崔鶯鶯は張生と詩を唱和した後、紅娘に催促されて退場する。そこに、荷塘はあえて金聖嘆本の指示を採用した。これはその前に見える「目引紅娘上云」開了角門兒、將香卓出來者。」に合わせ、物語として讀みややすくするための工夫だろう。

前掲の第二折三套「負盟」の「五供養」のように、注が王、凌兩本を織り交ぜて作られるだけでなく、曲文にも古本より多くの組み合わせが見られることから、個性のある校注をしようとする荷塘の姿勢が、諺解本の全編を通じて強く見られる。「王云」、「即云」のように出典を示すところもいくつかはあるが、それらは殆ど校勘や音律の説明と関わっている。例えば、第三折の四套に次のようにある。



〔禿廝兒〕 倆身臥着一條布衾、頭枕着三尺瑤琴。他來時怎生和倆一處寢。他凍得來戰欽欽、說甚知音。〔「枕」、去聲。○「身臥着」、三句、指張生、「凍得」、二句、指鶯鶯。王云、「諸本俱作『戰戰兢兢』、於禿廝兒調、多一字、今去一『戰』字。此五字句、當韻。下二字句、又韻。『兢』字入庚青韻、不叶。〔後略〕〕

この注は、實際には全て王注からの引用であるが、荷塘は「王云」を版本の異同と音韻に關する説明の前に置いている。しかし、全體的に見ると「王云」や「即云」が付いていないところがほとんどであるため、これらのことばが付いている箇所は、抄寫するときに消し忘れたという可能性もある。いずれにしても、遠山荷塘は諺解本を編纂する際に、前後の食い違いや注の付け方に問題があるところを修正し、全體の統一を圖ることによって、読みやすくしようとしたということが言える。また、王、凌兩本のほかに金聖嘆本なども積極的に活用していることから、自身の特色ある『西廂記』を作成しようとする姿勢が強く窺える。以上のような工夫は、本書を出版しようとする意志があつたからこそ凝らされたものだと言えよう。

### おわり

『譚解笑林廣記』の奥付に遠山荷塘の『諺解校注古本北西廂記』が出版豫定であるという記述が見られ、また「圭公終記（『譚朝川鼎東』）に荷塘の著作が「行將に上梓せんとす。」と書かれているが、それらの刊本は現在見ることはできない。だが少なくとも、脱稿したことに間違いはない。

寛文年間に『西廂記』が傳來してから、その注釋書はしばしば唐話の辭書に例證として引かれ、方言や俗語の學習において高い價値を示

した。そして、その物語を樂しみ、修辭に感心し、高く評價した人が少なからず存在した。朝川善庵や大窪詩佛といった名高い文人までもが荷塘の講義に参加したことから、當時『西廂記』がかなりの注目を浴びていたことが分かる。つまり、複数の『西廂記』版本が傳來したと、それに對する學者たちの關心が高まったことが、諺解本の編纂を促したのである。

また諺解本の編纂には、長崎での遊學によって唐話や詞曲の學を身につけた遠山荷塘の、俗文學を廣めることで功績を擧げようという思いが窺える。さらに、古本から諺解本への改作過程から、作品の意味を解釋することの他に、唐音で讀むことも目的の一つとしてあつたことが分かる。

江戸時代には人々の戯曲に對する知識は乏しかったが、遠山荷塘は複数の『西廂記』版本を組み合わせることによつて、訓點と注の兩方を備えた諺解本を編んだのである。このことによつて、從來ほとんど讀み物としてしか扱われてこなかつた『西廂記』が、諺解本に至つて本格的な研究對象となつたと言えよう。

當時日本に傳來していた『西廂記』版本の中でもつとも流通していたのは、金聖嘆の『第六才子書』であつたと思われ<sup>26</sup>。だがそうした中、朝川善庵らは遠山荷塘の死後にも關わらず諺解本の出版を計畫した。このことは、彼らが諺解本の價値を十分理解し、より多くの人に讀ませようとしたことを示しているのではないだろうか。

### 注

(1) 石崎又造『近世日本に於ける支那俗語文學史』（弘文堂、一九四〇年）

第六章第三節「江戸に於ける唐話學及俗文學の一斑」。山口剛『山口剛

著作集』(中央公論社、一九七二年發行、一九八〇年再版)第六卷「荷塘印影」。

(2) 諺解本の影印本は長澤規矩也編『唐話辭書類集別卷』(汲古書院、一九七七年)に收められている。

(3) 『外國語科研究紀要』第二五卷第四號、東京大學教養學部外國語科、一九七八年。

(4) 前掲注(2)書解説。

(5) 『支那哲文學』第二號、東洋大學支那學會、一九三五年。

(6) 王、凌兩本には、折の分け方や楔子の有無、本文のことは、脚色、題目正名等、多くの異同が存在する。田中謙二『西廂記』板本の研究(上)、(下)、『田中謙二著作集』第一卷、汲古書院、二〇〇〇年)に詳しい。

(7) なお、傳田章氏は前掲注(3)論文で「荷塘は王、凌、金(筆者注:金聖嘆の『第六才子書』を指す)本のほかに、名をあげてはいないが、もう一、二種の版本をみている可能性がある。」と指摘する。氏の指摘を補足すると、遠山荷塘は諺解本と古本を編纂する際、関本(『六幻西廂記』)や毛本(『毛西河論定西廂記』)なども参考にした可能性がある。

例えば、諺解本第二折第一套「天下樂」曲に「我則索鬪伏定鮫綃枕頭兒上甌」という句があり、その注の「鮫綃」出『北夢鎖言』。鮫人泉客織于氷臺、賣與人間。昔張建章爲幽城司馬、曾以府命行渤海、遇水仙遺鮫綃帕曰、「夏月溽暑展之、滿堂凜然。」は、関本「五劇箋疑」(明致和堂刊本影印本第八册、文化藝術出版社、二〇一二年)「二之一白馬解圍」の同箇所に付された『北夢鎖言』、鮫人泉客織于氷室、賣與人間。昔張建章爲幽州司馬、嘗以府命行渤海、遇水仙遺鮫綃帕云、「夏月溽暑展之、滿堂凜然。」という注とほぼ一致する。また、古本卷二第一折「混江龍」曲に「香消了六朝金粉」という句があり、その注に「金粉、房幃中飾也。」とあるのに對し、毛本(『古本「西廂記」彙集・初集』第五册所收民國

年間誦芬室重校刊本影印本、國家圖書館出版社、二〇一一年)卷二第五折の同箇所にも「金粉、房幃中飾也。」とあることから、毛本を参考にしたと思われる。

(8) 汲古書院、一九七九年。

(9) 古本は國立國會圖書館藏『古本西廂記』を、諺解本は前掲注(2)書所收慶應義塾大學附屬研究所斯道文庫所藏『諺解校注古本西廂記』影印本を、王本は民國十八年北平富晉書社東來閣書店影印明萬曆四十二年香雪居刊『新校注古本西廂記』(中西書局、二〇一三年)を、凌本は民國年間貴池劉氏暖紅室所輯『彙刻傳劇』所收『西廂記五劇』影印本(『暖紅室彙刻傳奇西廂記』、江蘇廣陵古籍刻印社、一九九〇年)を用いる。

(10) 『昭陽先生文集二編』(龜井南冥昭陽全集)第八卷下、葦書房、一九八〇年)卷三「圭公終記(譯朝川鼎東)」。

(11) 朝川善庵『樂我室遺稿』卷三(『崇文叢書』第二輯之五二、崇文院、一九三二年)。

(12) 傳田章氏前掲注(3)論文に「a本からb本へ改稿という想定が正しいとすれば、b本の下冊はa本を若干増補した清書といえるだろう。」とある。

(13) 『中國中世文學研究』第五六號、中國中世文學會、二〇〇九年。

(14) 『廣瀬旭莊全集』日記篇三、思文閣、一九八三年。

(15) このことについては、徳田武「遠山荷塘と『金瓶梅』」(『日本近世小説と中國小説』、青裳堂書店、一九八七年)や川島氏前掲注(13)論文を参照。

(16) 「遠山荷塘と『金瓶梅』」(前掲注(15)論文)。

(17) 『昭陽先生文集初編』(龜井南冥昭陽全集)第八卷下、葦書房、一九八〇年)卷一三。

(18) 豊橋創造大學附屬圖書館藏『諺解笑林廣記』(和泉屋金右衛門、一八

二九年)。

- (19) 徳田武氏は「遠山荷塘と龜井昭陽」(『明治大學教養論集』第二三三號、明治大學教養論集刊行會、一九八九年)、「遠山荷塘と廣瀬淡窓」(『明治大學教養論集』第二三三號、明治大學教養論集刊行會、一九九〇年)において、遠山荷塘と龜井昭陽一門及び廣瀬淡窓一門との交遊について詳しく考察されている。

(20) 前掲注(17)書卷一三。

(21) 『淡窓小品』(『増補淡窓全集』中卷、思文閣、一九二六年發行、一九七一年再版)卷上。

(22) 金聖嘆本は早稻田大學圖書館所藏『懷永堂繪像第六才子書』を使用した。

(23) 諺解本と古本は、いずれも複数の注が複雑に入り混じっており(王注や凌注に他本の注を差し込む等)、それぞれの注の出處の判断が難しい部分がある。だが、例えば諺解本と古本それぞれの卷一には、欄外注を含めて王本からの引用が少なくとも六十三箇所と六十箇所存在し、その數はほぼ同じである。これに對し、「王(伯良)云」とはつきり出處を示している箇所が古本では四十八、諺解本では僅か七と、數に差がある。

(24) 前掲注(14)書の弘化二年七月六日の條に「師又讀某先生所著某錄曰、『此儉西人之言而易其題目者。』某先生聞之怒、將喉權貴、案其破戒之罪。師大憂、遂鬱而死。」(師又た某先生の著す所の某錄を讀みて曰く、「此れ西人の言を儉みて其の題目を易ふる者なり」と。某先生之を聞きて怒り、將に權貴を噉し、其の破戒の罪を案へしめんとす。師大いに憂へ、遂に鬱して死す。」とあり、徳田武氏は「遠山荷塘と龜井昭陽」(前掲注(19))において「一圭が某錄を唐人の書の剽竊と批判して、某先生から陥れられそうになったとは、佐藤一齋の『言志錄』を『近思錄』の作り變えだと評し、それが大名にも影響力のある一齋をして策謀せしむるこ

とになったのではあるまいか。」と推測する。徳田氏の推測が正しいかどうかはともかく、荷塘が權威のある人に陥れられ、そのために諺解本の刊行が取り止めとなった可能性はあるであろう。

(25) 拙稿「江戸における『西廂記』の傳來とその受容について」(『中國學研究論集』第三四號、廣島中國文學會、二〇一六年)を参照。

(26) 前掲注(25)論文を参照。